合理服、スポーツ、自転車
――19世紀イギリスの女性解放運動

志渡岡　理　恵

はじめに

実践女子大学の創設者である下田歌子（1854-1936）は、1893年、欧米各国の女子教育を視察するために渡欧した。下田は、イギリスに2年間滞在した後、フランス、ドイツ、スウェーデンなど欧州6か国とアメリカを視察し、1895年に帰国する。2018年4月5日から27日まで実践女子大学香雪記念資料館で行われた「第18回 学祖 下田歌子展 下田歌子と体育」の展覧会パンフレットによれば、欧米でスポーツをする女生徒たちや社会進出する女性たちの姿を目にした下田は、帰国後、「一般女性の地位向上のためには大衆女子の教育が急務」として、帝国婦人協会実践女学校を設立し、その教育の根本を「知育」、「体育」、「徳育」とした（2）。欧米諸国の視察は、下田に一般女性の教育の必要性を痛感させ、女性の知性、身体、精神をバランスよく発達させることの重要性を認識させる機会となったと言えよう。

1893年12月、40歳でロンドンを訪れた下田は、英語学校に入学して英語を学び、ポートランド伯爵夫人に伴われ、女子教育の現場に積極的に足を運んだらしい（松田3）。イギリスの女子中等・高等教育機関を訪れ、そこで生き生きと学ぶ女子学生たちやスタッフ、設備などをつぶさに観察した下田は、その視察から吸収したさまざまなものを、日本の女子教育にとり入れた。イギリスをはじめとする海外での経験は、下田の教育理念とその実践に大きな影響を与えたと考えられる。

下田が訪れた19世紀末のイギリスでは、女子教育改革や衣服改革の成果

により、動きやすい服を着た女性たちがスポーツを楽しみ、自転車で自由に移動し始めていた。本稿の目的は、下田が目にしたこれらの現象の背景にある女性解放運動の理念と活動を振り返り、その意義について考察することである。

1. ブルーマーから合理服協会へ

イギリスの女性解放運動はさまざまな側面から推し進められたが、まずは、19世紀末に大きな変化を遂げたイギリス女性のファッションの変遷をたどり、その改革を牽引した合理服協会の活動を確認しよう。戸矢理衣奈『下着の誕生――ヴィクトリア朝の社会史』によれば、西洋では、女性の身体のシルエットは、大きく分けて3つの特徴的な時期を経験している（14-5）。第1期は、古代ギリシアから中世（5 ～ 15世紀頃）の終わりにかけての時代で、ドレープの美しいゆるやかな衣装が特徴であり、身体のラインが意識されることはあまりなかった。第2期は、中世末から20世紀初めまでの時代で、この時期からウエストのくびれが意識されるようになった。第3期は多様な衣服が着用されるようになった現代である。第2期にウエストのくびれが意識されるようになった明確な理由は分からないが、服飾史家は、「封建制度の強大化と教会権力の弱体化」や「騎士道の登場に伴うロマンティック・ラヴの概念の登場」をその理由として挙げている（14）。下田が訪れた19世紀末のイギリスは第2期にあたり、ウエストのくびれは依然として意識されてはいたものの、女性たちは身体を締めつけすぎない、より快適で動きやすい衣服を求め始めていた。

19世紀のイギリスでは、女性のファッションはかつてないほど目まぐるしく変わっていった。1837年から始まるヴィクトリア時代の初期には、クリノリン・スカート（ふくらみのあるスカート）が流行していた。女性たちは、最初はペチコートを何枚も重ねてスカートを広げていたが、1856年にスケルトン・ペチコートが登場すると、この格段に軽くて動きやすい金属製のフープをこぞって着用するようになった。スケルトン・ペチコート

は、1865年頃には女性使用人たちにまで普及したと言われ、女性たちの動きをそれまでよりはるかに楽にし、外出を容易にした（戸矢25-7）。

このクリノリン・スカートの全盛期に、アメリカの女権拡張論者アメリア・ブルーマー（Amelia Bloomer）が渡英し、短いスカートの下にパンタロンを重ねたブルーマー・コスチュームの着用キャンペーンを行った。女性がズボンを着用することは当時の人々にとって大きな衝撃だったようで、1850年代には新聞、雑誌、ミュージックホールと至る所でブルーマーは嘲笑の的になった（戸矢28）。イギリスを代表する風刺雑誌『パンチ』（*Punch*）にもブルーマー・コスチュームを身にまとった女性が数多く登場し、その大部分が当時のジェンダー規範から逸脱する行為をしている。たとえば、1851年10月25日号の「舞踏室におけるブルーマリズム」（“Bloomerism” in a Ball-Room”）と題された挿絵には、ソファーに慎ましやかに腰かけた男性にブルーマー・コスチュームの女性が近づき、ダンスを申し込む様子が描かれている（図1）。1851年11月1日号の「ブルーマリズムの喜ばしい成果のひとつ――女性の方からプロポーズする」（“One of

図1　『パンチ』1851年10月25日号

the Delightful Results of Bloomerism – The Ladies will Pop the Question.”）では、食事中の男性の元にひざまずいた女性が右手で彼の左腕を掴みながら「私のものになってくれますか？」と請い、男性は右手にフォークを持ったまま目を伏せて「ママに訊いてくれなきゃ」と背を向けている（図2）。1853年のカレンダーでは、鬘をかぶり「大法官裁判所通り」（“Chancery Lane”）を歩く女性が描かれ、その下に「法廷弁護士」（“The Barrister”）とキャプションがつけられている（図3）。これら3枚の風刺画が表しているのは男女の役割の逆転、女性の男性化で、そこには、女性が男性の領域に侵入してくることへの警戒と敵意が感じられる。風刺の背景にあるのは、女性が男性の特権を侵害することへの恐れである。

このように女性のズボン着用が嘲笑と批判を巻き起こした一方で、女性のクリノリン・スカートは巨大化して数々の事故を引き起こしていた。スカートへの引火が原因で火傷を負う女性や、馬車の出口で転倒して負傷する女性が続出したため、1867年には新聞や医学誌にクリノリンによる女性の死亡事故を扱った記事や論文が相次いで発表された（戸矢35）。その結果、

ONE OF THE DELIGHTFUL RESULTS OF BLOOMERISM.—THE LADIES WILL POP THE QUESTION.

Superior Creature. “Say! Oh, say, Dearest! Will you be Mine?” &c., &c.

図2 『パンチ』1851年11月1日号

クリノリンは急速に衰退し、替わって1870年代にはコルセットをきつく締めあげるタイトレイシングが流行することになる。当時は17～18インチ（約42.5～45センチ）が理想のウエストとされ（戸矢52）、その極端な細さは、頭痛、消化不良、食欲不振、呼吸困難、血行不良など、女性の健康に深刻な影響を与えた。こうした女性の健康への懸念が、多くの人々に衣服改革の必要性を感じさせることに繋がった。

そして、1880年代に本格的な衣服改革が始まる。1881年には合理服協会（The Rational Dress Society）が、1883年には合理服会（The Rational Dress Association）が、1890年には健康・芸術的衣服同盟（The Healthy and Artistic Dress Union）が、1898年には合理服連盟（The Rational Dress League）が相次いで設立された。これら4つのうち組織名に「合理服」とつく3つの団体は、ブルーマー・コスチュームに似た機能性重視の衣服の着用を推進したが、健康・芸術的衣服同盟だけは美しい芸術的衣服を理想として掲げた。この方向性の違いは構成メンバーの顔ぶれからも明らかで、健康・芸術的衣服同盟の副会長にはラファエル前派の画家G. F. ワッ

THE BARRISTER.

図3　『パンチ』1853年カレンダー

ツ（Watts）と妻が名を連ね、委員のなかには後にアーツ・アンド・クラフツ運動のガラスデザイナーとして活躍するヘンリー・ホリディ（Henry Holiday）がいた。また、機関誌にはウォルター・クレイン（Walter Crane）らが寄稿していた（鈴木3）。

一方、合理服協会は、会長のF. W. ハーバートン子爵夫人（Lady Harberton）やキング夫人（Mrs. King）ら女性が中心となって設立された組織だった。年会費は2シリング6ペンス、会誌『合理服協会会報』（*The Rational Dress Society's Gazette*）は1888年から1889年まで2年間、3か月に1度刊行された（米今315）。会誌は、記事8ページと広告4ページから成り、3ペンスで販売され、各号の冒頭には合理服協会の活動目的と入会の案内が記されていた。記事の多くは啓蒙を目的とする論説文で、1888年4月号には以下のような活動方針が記されている。

> The Rational Dress society protests against the introduction of any fashion in dress that either deforms the figure, impedes the movement of the body, or in any way tends to injure health. It protests against the wearing of tightly-fitting corsets, of high-heeled or narrow-toed boots and shoes; of heavily weighted skirts, as rendering healthy exercise almost impossible; and of all tie-down cloaks or other garments impeding the movement of the arms. (qtd. in Newton 116-17)

この声明には、健康と快適さを最優先するという合理服協会の機能性重視の姿勢が明確に打ち出されている。その理念を具体化して最も注目を集めたのがディヴァイデッド・スカートだった。

ディヴァイデッド・スカートとは一見スカートのようなゆったりしたズボンである。ディヴァイデッド・スカートは、1882年の全国健康協会展覧会や1883年の合理服展覧会などに出展され、その下にはく下着（コンビネーション）とともに、女性の男性化現象であるとして再び激しい議論を呼んだ（戸矢144-46）。しかし、ディヴァイデッド・スカートを使った合理服は、

重さが通常の4分の1であり、腕や脚の動きも妨げないため、一部の雑誌では賞賛された（戸矢146）。そして、本稿の第3節で詳説するように、1880年代末から始まる自転車の流行により、やがてサイクリング用の衣服として普及することになる。合理服協会の会誌を調査した米今によれば、1888年4月6日発行の会誌には「ハーバートン」(“harberton”）と「ウィルソン」(“wilson”）という2種類のディヴァイデッド・スカートが紹介されている（316）。ハーバートンは、細身で足首周りの幅が2分の1ヤードあり、その周りには細いプリーツが沢山ついている。ウィルソンは、それよりも幅広で、プリーツがウエスト近くまである。このウィルソンは日本の袴を参考にしたものである。1889年7月1日発行の会誌によれば、『デイリー・ニュース』(*The Daily News*）の記者シマダ氏が合理服協会に袴を贈ったが、その数年前に合理服協会のメンバーがすでに袴を購入し、それを基にウィルソンを考案していた（317）。下田歌子は帰国後、女子用袴を考案したが、この袴とディヴァイデッド・スカートをめぐる日英の影響関係は、異文化交流のひとつの例として大変興味深い。

こうして19世紀末には、女性が快適で便利な衣服を着用することに対する抵抗感が徐々に薄らいでいった。その風潮を後押ししたのは、19世紀後半に続々と創設された女子の中等・高等教育機関による体育・スポーツのカリキュラムへの導入である。次節では、学校教育と衣服改革の関係を読み解いていく。

2. スクールガールと体育

前節でとりあげた女性のファッションと同様に、イギリスの女子教育も19世紀に大きく変化した。その変化をひと言で要約すると、家庭教育から学校教育への移行である。19世紀前半まで、イギリスの中産階級以上の少女たちは、主に家庭でガヴァネス（女性家庭教師）や家族によって教育されていた。教育内容は、音楽やダンス、絵画、フランス語会話など才芸（accomplishments）と呼ばれるもので、その主な目的は、男女の出会いの

場である舞踏会などで才芸を披露し、良い結婚相手に選ばれる可能性を高めることだった。しかし、19世紀後半に入ると、エミリー・ディヴィス（Emily Davis）らによる女子教育改革が行われ、男子のパブリックスクールと同じようなカリキュラムの女子パブリックスクールをはじめとする女子中等教育機関が設立され始めた。エミリー・ディヴィスは、学校教育委員会に女子教育も調査の対象に含むよう請願活動を行い、1868年、ついにイギリス政府が中産階級の女子教育の欠陥―基礎学力に基づいた体系だった教育の欠如―を認めたのだった（堀内51）。学力重視の女子パブリックスクールでは、男子生徒と同じように代数や化学、古典が教えられ、体操やテニス、ホッケーなどのスポーツがとり入れられた。好田は、「ヴィクトリア朝後期における女子のスポーツ熱の高揚は、女子中等教育学校と女子高等教育学校の興隆と大きく関係している」と指摘している（「イギリス女子スポーツにおける団体競技の装い」23）。

こうした女子教育への体育・スポーツ導入の背景には、女性を産む性として捉える国家の思惑と政策があったと考えられる。1870年代半ば以降、帝国主義的な国家間競争が激化するなかで、「種の保存」という立場から将来の母としての少女の健康にかつてないほどの注目が集まった（戸矢174）。たとえば、当時の代表的な少女雑誌『ガールズ・オウン・ペーパー』（*The Girl's Own Paper*）の1884年5月17日号には、ウォレス・アーノルド夫人（Mrs. Wallace Arnold）による「少女たちの身体教育」（"The Physical Education of Girls"）という記事が掲載されている。この記事では、"If, then, the importance of duly training the body in conjunction with the mind is thus recognized in the cause of our boys, surely the future wives and mothers of England – for such is our girls' destiny – may lay claim to a no less share of attention in this respect"（162）と、将来の母である少女たちの身体教育も少年たちと同様に必要であると主張されている。そして、身体教育を始めるのは早ければ早いほどよく、それぞれの年齢に合った運動をすべきであるという見解が述べられている。さらに、"In these days of higher education for women we are apt to forget the fact that, while forcing the mental faculties to

the utmost at an early age, the precious time is slipping away during which their figures are being formed, and that habits are too often engendered which in later years cannot be abandoned or remedied”（162）と、女子高等教育が始まった今、長時間座って勉強ばかりしていると、身体が形成されつつある成長期に悪影響を与えるのではないかという懸念が示され、それを解消するための手段として「チェスト・エクスパンダー」(“chest-expander”）を用いた柔軟体操が提案されている。チェスト・エクスパンダーとは両端に持ち手のついたゴムのバンドで、その使用法は12の図とともに詳説されている（図4)。著者ウォレス・アーノルド夫人は、特別な器具を必要としないこの柔

THE PHYSICAL EDUCATION OF GIRLS.

By Mrs. WALLACE ARNOLD.

From the number of works existing on education it might be supposed that nothing fresh, or rather of interest, remained to be said on the subject; and doubtless this is true as far as regards the mental education of girls, which in late years has taken such immense strides. But there is one branch which appears to me not to have as yet received that attention which it deserves; need I say that I allude to their physical education, concerning which, as the title of my paper suggests, I would offer a few remarks?

Firstly, then, as to its necessity. In the case of boys we have but to look around us to see in what light it is regarded. A glance at any of the numerous school-magazines, or even the ordinary daily papers with their reports of athletic meetings, and accounts of football and cricket matches, etc., so often described in what seems to us so much unintelligible jargon, will assuredly testify that physical instruction is not forgotten or neglected in scholastic life. Indeed, to some anxious parents it would seem as though mental acquirements were too often subordinated to physical superiority, and one of our leading novelists took this view of the question in a recent novel. At any rate, no school for boys now but has its athletic club, and few that are without a gymnasium.

If, then, the importance of daily training the body in conjunction with the mind is thus recognised in the cause of our boys, surely the future wives and mothers of England—for such is our girls' destiny—may lay claim to a no less share of attention in this respect.

One of the most beneficial results of a really good education is undoubtedly the equilibrium established between the respective powers, mental and physical. I might here quote that trite but ever true line of Juvenal, *Mens sana in corpore sano*, which many of our girls have doubtless read when examining with admiring eyes the silver medals of the Oxford University Athletic Club, brought home and exhibited with manly pride by their brothers, or those brothers' friends, who are oftimes of more interest in their eyes for the time being. I could add much more as to the necessity, but I have at least made out a primary case, and must pass on to more practical considerations, and the first of these that naturally presents itself is, at what age should this physical education commence? To which I reply, it can hardly begin too early, though of course all exercise should be proportionate to age. “Let children,” says Rousseau, “have substantial nourishment; let them run and play in the open air and enjoy their liberty.”

In these days of higher education for women we are apt to forget that, while forcing the mental faculties to the utmost at an early age, the precious time is slipping away during which their figures are being formed, and that habits are too often engendered which in later years cannot be abandoned or remedied. Many an anxious mother must have observed with pain how many hours her daughter is compelled to sit at her studies, the greater portion of the time being occupied in writing, and that at a desk which compels an attitude that must result in a stooping form. If not engaged in writing, she is probably at the piano, where the back again, having no support, becomes weary, and sinks on one side; then to the drawing-board, where the same stooping position produces a like result, inducing too often a curvature of the spine, as many of our doctors can testify.

Moderate bodily exercise, taken under supervision, will do much to correct—nay, prevent—this mischief. Many of the subjects of the education of the day are matters which can be as well, or perhaps better and more thoroughly, acquired after the age of seventeen. Not so a naturally easy and graceful carriage. From infancy up to about the age I have mentioned our bodies are being formed, and with them our habits, gait, and deportment.

Habit is a frequent repetition of the same acts causing different modifications in the organisation. In youth habit has the privilege of modifying the original constitution, and if the habit be a bad one, of injuring it so powerfully as to render the injury thus caused incurable. How careful, then, should we be that during these few early years none but graceful, elegant, and healthy habits are acquired. Of course, I am speaking now more particularly of bodily habits, though the rule applies with equal force to all, whether physical or mental. It is useless to recommend a child already deformed to keep straight; she may endeavour to make the effort, but following the bent of the acquired organisation, she quickly resumes the position that has become habitual. These considerations bring us to the second practical object of my paper—the best means of obtaining a good physical education for our girls; and these are calesthenics, practised when possible under a qualified teacher.

Calisthenics, practised under proper super-

図4 『ガールズ・オウン・ペーパー』1884年5月17日号

軟体操の利点は家庭で気軽にできることだと読者にアピールしている。この記事から読み取れるのは、社会状況の変化に合わせ、少女たちに実際的な助言をしたいという著者の想いである。

女子の身体教育の環境は、制度的・体系的に整っていく。1870年代末には、ロンドン教育委員会が女子の体育教育について本格的な対策をとり始め、体操の先進国であったスウェーデンから女性体操教師を招聘した（戸矢176）。少女たちの体育教育も初めて体系化され、リクリエーションとしてではなく、積極的な酸素吸入法として系統だった体育の時間を設定する学校も登場し始めた（176-7）。山村明子によれば、1875年にはチェルトナム・レイディーズ・カレッジでテニスが導入され、1877年にはセント・レズナ校で週1回の体育の授業が行われるようになった（22）。内海和雄は、「女性スポーツの誕生」において、1890年代には女子体育学校が続々と創設され、女子体育教員が誕生したと述べている（5）。

このように、女子教育の現場で体育・スポーツが推奨され始め、少女たちは学校で身体を動かすことで身体を育み、ホッケーなどの団体競技で団体精神を養うことになった。好田によれば、最初は体操やテニスといった「レディらしさ」を保つことができる種目が中心で、レディらしくないとされた団体競技ホッケーのカリキュラムへの導入は1890年代に盛んになり、やがて対抗試合まで行われるようになった（「イギリス女子スポーツにおける団体競技の装い」23）。体操は身体の鍛錬のために導入され、初期には「美容体操」という名称でカリキュラムに組み込まれた。ローンテニスはまず1880年代に家庭での社交パーティーとして流行し、個人競技として学校教育にも導入された。ホッケーは男性スポーツの代表として流行したが、19世紀末に女子パブリックスクールの団体競技として導入されるようになり、20世紀初頭には女子のスポーツ熱の象徴的存在となった（26）。素早い判断力と行動力、団結力が必要とされるホッケーは、「知的エリート女性にふさわしいスポーツというイメージ」を持たれ、少女たちの「憧れのスポーツ」となっていった（27-8）。

当時のホッケーの人気のすさまじさは、少女雑誌にも記録されてい

る。『ガールズ・オウン・ペーパー』の1902年10月25日号に掲載されたリリー・ワトソン（Lily Watson）の「少女たちの運動競技熱」(“Athleticism for Girls”）という記事を見てみよう。ワトソンは、祖母の時代、1860年代、現在（1902年）の女学校における身体教育の違いを具体的に説明し、現在のスポーツ熱について次のように述べている。

> Times have indeed changed, and we have changed with them!
>
> In selecting a boarding-school for her daughters, the first question of many a matron is now, “Do they play hockey? Are the games good?” To ensure the variety and efficiency of games is one chief care of the Principal, and she frequently has to provide a “Game Mistress.” Hockey and cricket, as well as tennis, are encouraged to the full. Hockey especially seems fast growing in favour. The afternoons in many schools are devoted to these outdoor games; they are a sine qua non. Even day schools have their “playing field,” and keen is the emulation between school and school. (183)

記事によれば、今では寄宿学校を選ぶ際に最初に確認するのはカリキュラムにホッケーが組み込まれているかどうかであり、学校側もホッケーをはじめとする運動競技の環境整備に力を入れている。多くの学校では、午後の時間は戸外での運動競技に割り当てられ、今や運動競技は必要不可欠のものとなっている。クリケットやテニスも奨励されているものの、急速に人気が高まってきているのはホッケーである。著者ワトソンは、この現象について“We are wise now in understanding that the ‘sound mind’ must dwell in the ‘sound body,’ and modern schoolgirls reap the benefit of this enlightenment”（183）と述べ、女子教育が「健全な精神は健全な肉体に宿る」をモットーとするものへと変わってきたことを率直に喜んでいる。

スポーツの流行がより動きやすい服の需要を生むのは自然な流れである。当時人気を博したスポーツは、種目によってそれぞれ異なる影響を衣服に与えた。好田によれば、体操の装いは、濃いブルーのチュニック・ニッ

カーボッカーズ・ストッキングが典型的なスタイルで、このスタイルが採用された背景には以下のような事情があった。

> 十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、帝国主義の影響を受け、エリート女子高の少女だけでなく、労働者階級の少女の身体教育の重要性が高まった。すなわち、帝国の兵士となる男子を生む健康な母体が必要とされ、身体鍛錬としてスポーツが取り込まれていったことから、個人の身体鍛錬である体操の装いには、機能的な要素が強く求められたといえる。体操は多くは室内で行われ、人目に触れないことを前提としている点が機能的な衣服を取り入れやすかった要因のひとつである。（33）

高価な器具の必要ない体操は労働者階級を含む幅広い階級の少女たちを対象としていたのに加え、その多くは室内で行われ、人目をさほど気にしなくてよかったために、動きやすさを最優先にした衣服が着用されたということである。一方、ローンテニスは、最初は男女の出会いの場であるガーデンパーティで楽しまれていたため、装いはファッショナブルなドレスであった。それが、家庭内の娯楽として楽しまれるようになると、ブラウスとスカートというシンプルなスタイルに変わり、やがて学校教育に導入されると、初期には日常着が、20世紀初頭には白いユニフォームが着用されるようになった（32-3）。団体競技であるホッケーには当初からユニフォームが着用され、白いブラウス、丈の長い黒いスカート、ネクタイが標準的だった。好田はユニフォームについて次のように指摘している。

> 女子教育改革の象徴ともいえるスポーツであるホッケーは、団体競技としての教育効果を期待したもので、女学校とチームへの帰属意識、団結心、競争心という、新しい感覚を女子生徒と女子カレッジ生にもたらした。このホッケーを中核とした団体競技のユニフォームのカラーやネクタイの柄が、エリート女学校のシンボルとして定着していき、

学校の誇りを表象する制服へと発展していった。(「イギリス女子スポーツにおける団体競技の装い」35)

同様に、堀内も「女子中等学校における制服とスポーツの導入は、学校内部の団結意識や他校への対抗意識と優越感の形成」に繋がっていったと述べている（88-9)。このように、スポーツは、衣服を動きやすいものに変化させていったばかりでなく、特に団体競技においては、衣服に団体精神を育むアイテムという新たな役割をも付与したのである。

3. 自転車の流行

前節で確認したように、スポーツは、学校教育と結びつくかたちで女性たちの間に普及し、女性の身体に関する意識を変えるとともに、衣服にも大きな変化をもたらした。スポーツで身体を鍛え、動きやすい衣服をまとった女性たちは、同時期に流行した自転車によって、さらに外へと活動範囲を広げることになる。

1880年代末にイギリスで自転車が流行したのは、1885年に後輪駆動で前後輪同サイズの安全自転車ローヴァーが登場し、1888年に空気タイヤの開発により現在とほぼ同型の自転車が販売されるようになったからである(「自転車に乗る女性」19-20)。それ以前の自転車は、前輪が後輪に比べ極端に大きく危険で、男性のリクリエーションとして捉えられていた（戸矢186)。1890年代には、自転車は年間75万台生産され、広い階層に普及した(戸矢187)。

女性たちの間で自転車がいかに流行していたかは、『ガールズ・オウン・ペーパー』の1895年10月5日号の記事「サイクリングのための服」(“The Dress for Bicycling”)を見るとよく分かる。著者(Dora de Blaquière)は、“There can be no doubt of the interest taken in the subject of the cycle as a new form of exercise for women and girls, and this year in England it has been unquestionably quite the rage”（176）と、自転車が少女や女性の新しいエクササイズとし

て熱狂と言えるほどの関心を集めていると指摘したうえで、“But behind this purely fashionable view of the matter, there is the other view, that the bicycle seems to have come as a great emancipation to women...”（176）と、これは一時的な流行に終わるものではなく、女性解放に繋がるものであると鋭く予言している。そして、“As a means of getting about, without expense and with little fatigue, a practical method of locomotion for everyone, youthful as well as middle-aged, it possesses advantages which appeal to all, and which will secure it a permanent acceptance as a well-beloved and useful friend”（176）と、自転車があらゆる年代の女性の移動を容易にするものであると説明している。

図5 『ガールズ・オウン・ペーパー』1895年10月5日号

さらに記事では、自転車が女性の健康に良いとする医師の見解が紹介され、続いてフランス、アメリカ、イギリスで女性がどのような服装で自転車に乗っているのかが詳説されている。イギリスよりも先に女性のためのエクササイズとして自転車をとりいれたフランスでは、スカートが着用されることはなく、当初からブルーマー・コスチューム（図5中央）が適切な服装として受け入れられ、一部の風刺誌を除いては、それを批判する声は聞かれない。同様にアメリカでも、ブルーマー・コスチュームが多く用いられているが、その他にニッカーボッカーズやディヴァイデッド・スカート、ショート・チュニックとゲートル、テイラーメイド・スカートなども着用されている。そして、女性が何を着ていても、注目されることはなく、皮肉を言われることもない。一方、イギリスでは、上流階級の女性たちはスカート（図5右下）を好み、それ以外の女性たちはラショナル・コスチューム（図5右上）を着用するようになってきている。しかし、特に田舎の方では、ラショナル・コスチュームの女性たちは好奇の目で見られ、食事の提供を断られることもある（177-78）。

このように、フランスやアメリカに比べると、イギリスでは女性のズボン着用に対する抵抗感は依然として強く、当初は（上流階級を中心に）スカートの着用率が高かったようだが、記事の冒頭で述べられている通り、自転車は女性が自由に移動できる範囲を飛躍的に広げ、女性解放を推進した。それまでは常に付添人（シャペロン）と一緒に行動しなければならなかった女性たちは、ひとりで好きな場所へ出掛け、独立を感じることができるようになった。雑誌『レイディ・サイクリスト』（*The Lady Cyclist*）の1895年8月号には、そんな女性たちの気持ちが次のように表現されている。

> There is a new dawn, a dawn of emancipation, and it is brought about by the cycle. Free to wheel, free to spin out into the glorious country, unhampered by chaperon or even more dispiriting male admirer, the young girl of to-day can feel the real independence of herself, and while she is building up her better constitution she is developing her better mind.…How little and cramped seems

the life before the cycle came into it! (qtd. in Rubinstein 68)

この一節には、自転車によってもたらされた自由を満喫する女性たちの喜びに弾む気持ちが鮮やかに描き出されている。

1893年に渡英した下田歌子は、このように自転車で生き生きと動きまわる女性たちの姿を目にして、羨望の念を抱いたに違いない。帰国後、下田は、1900年に日本で初めて結成された女子による自転車倶楽部「女子嗜輪会」の会長に就任した（「第18回　学祖 下田歌子展　下田歌子と体育」6）。日本で最初に自転車に乗った女性は、のちにオペラ歌手となる三浦環と言われており、彼女は1900年、16歳のときに、上野の音楽学校まで自転車通学を始めた（「自転車に乗る女性」21）。紫の着物に緋の袴を身につけ、髪に白いリボンを結んで自転車に乗る彼女の姿は注目を集め、「自転車美人」というタイトルで新聞にも紹介された。さらに1903年には、小杉天外が、三浦環をイメージして、日本女子大学の女学生を主人公にした小説を読売新聞に連載した。以後、可憐な乙女と自転車は流行の最先端をいくハイカラなイメージとして受容された。また、日本女子大学では、創立時から体操の内容に「自転車運動」をとり込んでいて、自転車は運動会の出し物として1908年までプログラムに載っている（22）。日本女子大学の創設者である成瀬仁蔵は、1890年からの渡米中に見た、自転車に乗るアメリカの女子学生の姿に感銘を受け、開校の翌年に自転車部を設け、教育体操に自転車運動をとり入れたらしい（22-3）。イギリスでも1880年代、女子の体育のひとつとして3輪自転車が導入されていた（28-9）。

こうして、欧米における自転車の流行は、下田歌子や成瀬仁蔵らを通して、欧米の女性ばかりでなく、日本の女性解放にも大きな役割を果たした。スポーツと同様に、自転車も学校教育と結びつくかたちで女性解放を推進する力のひとつとなった事実は、女性解放運動における女子の学校教育の重要性を物語っていると言えるだろう。

おわりに

ここまで見てきたように、イギリスの女性解放運動は、ファッション、身体教育、テクノロジーの発達による移動手段の多様化（安全自転車の考案など）が連動するかたちで、複層的に推進されていった。さらに、イギリス、アメリカ、日本の女性解放運動は、互いに影響し合いながら、ときには驚くほどの共通の現象を見せつつ、それぞれの国の慣習や状況に応じて多様な展開を遂げていった。字義的にも比喩的にも、女性が「家庭」から「外（社会）」へ向かい始めた19世紀末は、それが特に顕著な時代だったと言えるだろう。

そのような変化の時期に、海外視察に赴いた下田歌子は、女子教育を中心とするイギリスの女性解放運動から多くのものを吸収した。帰国後の下田の精力的で多彩な活動がそれを証明している。そして、下田をはじめとする日本の女子教育者たちは、海外での経験を起点として、さまざまな女子教育改革を推し進めていった。19世紀末と同様に現在も、他国の女子教育の取り組みから学べることは多いに違いない。

図版一覧

図1　小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ――図像資料で読む19世紀世界　第2巻』柏書房, 1995, p.286.

図2　Ibid., p.287.

図3　Ibid., p.292.

図4　Terri Doughty ed., *Selections from The Girls Own Paper, 1880-1907*, Broadview Press 2004, p.162.

図5　Ibid., p.177.

引用文献

Arnold, Wallace. “The Physical Education of Girls” *Selections from The Girl’s Own Paper, 1880-1907*, edited by Terri Doughty, Broadview P, 2004, pp.162-64.

De Blaquière, Dora. “The Dress for Bicycling” *Selections from The Girl’s Own Paper, 1880-1907*, edited by Terri Doughty, Broadview P, 2004, pp.176-78.

Newton, Stella Mary. *Health, Art & Reason: Dress Reformers of the 19th Century*. John Murray, 1974.

Rubinstein, David. “Cycling in the 1890s” *Victorian Studies*. Vol.20 No.1 (1977) 47-71.

Watson, Lily. “Athleticism for Girls” *Selections from The Girl’s Own Paper, 1880-1907*, edited by Terri Doughty, Broadview P, 2004, pp.183-84.

内海和雄「女性スポーツの誕生」『広島経済大学研究論集』第40巻第4号（2018）pp.1-21.

好田由佳「イギリス女子スポーツにおける団体競技の装い――一九〇〇年前後のホッケーを中心に―」『服飾美学』第60巻（2015）pp.23-40.

---.「自転車に乗る女性―ヴィクトリア朝後期イギリスと明治時代の「新しい女」―」『堺女子短期大学紀要』第 46・47巻（2012）pp.17-35.

米今由希子「19世紀後期イギリスにおける合理服協会の衣服改革――*The Rational Dress Society’s Gazette*から――」『日本家政学会誌』第59巻第5号（2008）pp.313-19.

実践女子大学香雪記念資料館「第18回 学祖 下田歌子展 下田歌子と体育」展覧会パンフレット、2018.

鈴木桜子「19世紀イギリスにおける改良服運動とその周辺」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要』第6巻（2007）pp.1-12.

戸矢理衣奈『下着の誕生――ヴィクトリア朝の社会史』講談社、2000.

堀内真由美『大英帝国の女教師――イギリス女子教育と植民地』白澤社、2008.

松田十刻「すべての女子に自活できる知識と技能と品格を――下田歌子と実践女子大学」『歴史街道』2月号（2015）pp.1-4.

山村明子『ヴィクトリア朝の女性たち――ファッションとレジャーの歴史』原書房、2019.

＊本論文の執筆にあたり、実践女子大学香雪記念資料館の奥島尚樹部長より、日本における自転車の流行および下田歌子に関する貴重な資料を提供していただきました。心より感謝いたします。

＊本稿は、2019年11月27日に実践女子大学渋谷キャンパスに於いて開催された実践女子学園創立120周年英文学科公開講座シンポジウム「「動く」女性――日英米の女子教育と服装改革の歴史」（講師：稲垣伸一、大関啓子、広井多鶴子、志渡岡理恵）における発表「合理服、スポーツ、自転車――19世紀イギリスの女性解放運動」を基にしたものである。

＊本論文は、JSPS科研費JP19K00426（基盤研究C 2019-2021年度「イギリスの女子大生小説と少女雑誌――教育とキャリア形成に関する学際的研究」）の助成を受けたものである。